様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2022～2023
課題番号：２２Ｋ１３０４１

研究課題名（和文）植民地台湾の初等教育とアイデンティティ形成：龍瑛宗、張文環、周金波、呂赫若を例に

研究課題名（英文）Elementary Education and Identity Formation in Colonial Taiwan: Focusing on Long Yingzong, Zhang Wenhuan, Zhou jinbo and Lu Herou

研究代表者
孫　世偉（Sun, Shihwei）

青山学院大学・文学部・助教

研究者番号：３０８８１９６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　800,000円

研究成果の概要（和文）：日中戦争、太平洋戦争戦時下の台湾において、日本語で創作活動を行った龍瑛宗、張文環、周金波、呂赫若が、伝統的儒教的教育の場が失われた時代に、公学校で啓蒙教育を受けた。それぞれ戦争に反対して左翼運動に傾倒したり、比較的に中立な態度で望んだり、積極的に文学を通して戦時下イデオロギーに関ったりするなど、それぞれ違う立場を取った。しかし四人に共通しているのは、一見従順な帝国臣民の装いをしていても、自らのアイデンティティの不安定さが作品から見え隠れている。上記のような立場の違いは、自己認識へ対する再定義と合理化であり、戦争という極限な状況に対するレスポンスではないかと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
明治維新により意図的に創り出された「国民＝ネイション」の概念は、内地においても教育によって広まり、日本本土の人々を帝国の臣民に規定するにとどまらず、それがさらに周縁へと拡大し、アイヌや沖縄の人々などにも波及した。西欧列強の植民地支配の構造を再現しつつ、対外戦争によって取得した植民地である台湾にも同じ論理を導入しようとしたが、「国民」の線引きの難しさが際立った。ところが1930年代以降の戦時下の文脈において、戦争目的を完遂させるために、急激に推進された皇民化政策を推し進め、本来「異民族」だった人々も臣民に規定しようとしたが、簡単には浸透しきれなかったことを文学作品への分析を通して示した。

研究成果の概要（英文）：Four Taiwanese writers who published in Japanese language during the Sino Japanese and the Pacific wars- Long Yingzong, Zhang Wenhuan, Zhou Jinbo and Lu Herou- received their elementary level education at a time when old educational system of cultivating traditional Chinese literai was prohibited. During the war time, the four writers face an identity crisis that cause they respond differently to Japanese wartime policy. Some chose to devote himself to left-wing antiwar movement, some maintained a third-person point of view, while some took part in the propaganda of wartime ideology. However, even though they presented an obedient attitude by playing the role of royal subjects of the empire, they all found instability and challenge in their national identity since they are ethnically Han Chinese. I argue that these different attitudes are responses to the extreme situation that helped rationalize their identity: being a subject of the Japanese Empire and an ethic Chinese.

研究分野：日本文学

キーワード：植民地台湾　国語教育　龍瑛宗　張文環　周金波　呂赫若

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
（１）2020 年度研究課題「行われた昭和十二年以降初等教育における「国語」教科書の比較研究：内地と植民地台湾を中心に」（課題番号：20K21990）の成果を踏まえ、植民地台湾の国語教育に使用された第二期、第三期公学校教科書で啓蒙教育を受けた日本語非母語話者が、初等教育とイデオロギーの形成に具体例を踏まえて検討する必要を感じた。
（２）日本文学研究の見地から、こうした初等教育を受けたものの中で、のちに文壇にデビューした台湾出身作家の作品を分析することにより、「日本臣民」としてのアイデンティティの持ち方は、内地出身の作家の違いを際立たせ、とりわけ戦時下という極限状態での帰属意識が作品の中に見え隠れていると考えた。

２．研究の目的
（１）初等教育の教育効果という側面の検証：先行研究の成果に踏まえ、日本語を母語としない作家たちの使用言語とアイデンティティの分裂に悩む問題について、テキストを踏まえて実例を分析する。1919 年台湾教育令の改正後、公学校における第二期、第三期教科書の教育効果を受けた当該作家たちの戦時下の作品を検証し、書房教育の廃止と伝統的儒教的教養の不在が、アイデンティティ醸成にどう関係したのかを再検討するのが目的である。
（２）本研究が取り扱う作家たちのアイデンティティは、生まれ持って日本人であると疑わずに保持するようになったものではなく、学校教育によって後天的に形作られたものである。植民地台湾で教育されたアイデンティティは、根底的に明治以降の近代教育で創り出された支配構造と共通するものがあると考え、その解明する一助になるとなる。
（３）明治維新により意図的に創り出された「国民＝ネイション」の概念は、内地においても教育によって広まったという歴史的経緯があり、それがいかに周縁へと拡大し、植民地台湾の人々などにどのような波及効果を持ったのかを検証する。帝国が対外戦争によって取得した植民地において、日本臣民としてのアイデンティティをどこまで同じ概念を適用させるべきかについては、時代によって変化し続けた。戦時下の文脈において、戦争目的を完遂させるために、急激に推進された皇民化政策の影響下で創作活動を勤しまなければならないこの世代の作家たちにとって、アイデンティティが更なる揺さぶりを検証する。

３．研究の方法
（１）伝統的儒教的教育の場が失われた時代に、公学校で啓蒙教育を受けた同世代の代表的四人の作家を取り上げ、戦時下に発表された作品に対して、テキスト分析を行う。同じ初等教育を受けているはずだが、のちに左翼運動に傾倒する者（呂赫若）、比較的に中立な態度で望む者（龍瑛宗、張文環）、積極的に文学を通して戦時下イデオロギーに関わる者（周金波）など、それぞれ違う立場を取ったとされる作家たちを取り上げた。それぞれの経歴、生育環境、経済的支援、高等教育の経験、職業など多くの違いがあり、個人の資質に帰すべきことが多いが、共通点を探るために四人を取り上げた。
（２）主に研究対象とする当該作家群の作品に対しテキスト分析を行い、特に戦時中に書かれた作品を取り上げ、初等教育における影響を試論する。とりわけ、第二期と第三期の教科書において、「忠君愛国」イデオロギー教育に関わる部分に関する記述と、作家たち自らが語った思い出などを重ね合わせて、どのような影響をもたらしたかを検討していきたい。この研究を通し、当該作家たちが戦時下の作品を論じ、それぞれのアイデンティティの持ち方と初等教育との関係を明らかにしようとするものである。そのため、研究対象として、意図的に出身も立場も大きく異なる人々を取り上げ、初等教育がもたらした影響を多元的視点明らかにする。

４．研究成果
（１）外形上「皇国民」のアイデンティティを示していても、植民地支配や戦争協力への賛否に関する態度は、保留的であるように見える。常にマイノリティの立場を強いられたが、順従な植民地作家の装いを演じていた。支配される客体でありながら、宗主国の言語である日本語を表現の手段として手に入れ、作家としての生存ストラテジーを立てつつも、不安定なアイデンティティを抱えたまま終戦を迎えることになった。
（２）複雑なエスニシティを持つ龍瑛宗や、戦争に対して比較的に保留的態度を取る張文環は、大東亜文学者会議に出席しているものの、外形上戦争協力の作品においても保留的な姿勢を見せている。呂赫若は、新劇改良を通して、封建的価値観に一石を投じることを夢見るものの、戦時下において皇民奉公の台湾興業統制会社のために台本を執筆したのを不本意な経験だと捉えている。戦時下に皇民作家と目される周金波ですら、志願することによってはじめて一人前の帝国臣民として認めてもらえることを作品で仄めかし、同じ帝国臣民であっても内地人と本島人との立場の違いを示している。
（３）皇国民のアイデンティティは、初等教育を通して築かれていくものの、現実の社会ではエ

スニシティの違いによる隔たりが厳然と存在している。戦時下の文脈で、表現者として活動するための生存ストラテジーを身につけているものの、日本語を母語としないこれらの作家にとって、場合によって皇国民と本島人としてのアイデンティティが峻別されているとテキストから見え隠れている。こうした二分法的なアプローチで理解しきれない複層性をもったアイデンティティが見せる複雑性について、さらなる検討の課題にしたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 孫　世偉	４．巻 42
２．論文標題 「石森延男研究序説」書評	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本教育史研究	６．最初と最後の頁 127-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 孫　世偉
２．発表標題 戦時下植民地台湾文学に見るエスニシティとアイデンティティ-作家・龍瑛宗を例に
３．学会等名 第7回日本移民学会冬季研究大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Sun, Shih-wei
２．発表標題 A Chimera of Colonial Education: Wu Feng’s Tale in Japanese Textbooks
３．学会等名 European Associon for Taiwanese Studies 2022 Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関